

新井朝雄・江沢 洋 『量子力学の数学的構造 I, II』  
 正誤表 (2007年7月30日)

『量子力学の数学的構造 I, II』に以下のような誤りがありました．お詫び  
 して訂正いたします．

頁	行	誤	正
13	↓ 7	量子物理	量子現象
22	脚注 7	ただし	ただし，
89	↓ 2	$= 2^n$	$= \sqrt{\pi}2^n$
89	↓ 4	$H_n/$	$H_n/\pi^{1/4}$
108	↑ 7	K	H
108	↑ 6	H	K
118	↓ 5	$A$	$\bar{A}$
118	↓ 8	$\ \bar{A}$	$\ (\bar{A}$
122	↓ 4	$R_{\lambda_0}$	$R_{\lambda_0}(A)$
152	↓ 7	a.e. $x$	a.e. $x$ ( $k \rightarrow \infty$ )
(9)	↓ 3	この場合，	この場合，そのような定数 $C$ の下限を
(9)	↓ 4	$:= \sup_{x \in X \setminus N}  f(x) $	トル
(9)	↓ 5	を	と記し，これを
(68) 右	↓ 3	160, (23)	160, 192, (23)
185	↓ 9	$P_{\pm}$	$\tilde{P}_{\pm}$
185	↓ 10	$P_{\pm}$	$\tilde{P}_{\pm}$
185	↑ 12	$P_{\pm}$	$\tilde{P}_{\pm}$
185	↑ 11	$FP_- = P_-F$	$F\tilde{P}_- = \tilde{P}_-F$
185	↑ 11	$FP_-H$	$F\tilde{P}_-H$
185	↑ 11	$FP_- = P_-F$	$F\tilde{P}_- = \tilde{P}_-F$
185	↑ 9	$UP_- = -P_-$	$U\tilde{P}_- = -\tilde{P}_-$
185	↑ 5	$FP_- = P_-F$	$F\tilde{P}_- = \tilde{P}_-F$
252	↓ 13	量子物理	量子現象
252	↓ 15	量子物理	量子現象
280	↑ 4	$\mathbb{R}^d$	$\mathbb{R}^3$
367	↑ 7	(3.172)	(3.171)
377	↓ 10	スペクトル	(別証：スペクトル
377	↓ 14	ゆえに，(3.203) の 第2の等式	この事実と $\ e^{-(s+it)A}\  = \ e^{-sA}\ $ により，(3.203)
377	↓ 14	れる．	れる．)
399	↓ 1	$b_j$ を	$b_j$ を次のように定義する：
399	↓ 2	$n) :=$	$n_d) := (-1)^{\sum_{\ell=1}^{j-1} n_{\ell}}$
399	↓ 2	$n),$	$n_d),$
399	↓ 3	$n)$	$n_d)$
399	↓ 4	このとき	ただし， $j = 1$ の場合， $\sum_{\ell=1}^{j-1} n_{\ell} := 0$ とする．このとき
466	次ページを参照		
475	↑ 9	関係と	関係 (4.95a) と
475	↑ 2	関係と	関係 (4.95a,b) と

p.466, ↓ 2, 「 $\Psi \in R(B_+)^{\perp} \dots$ 」から p.467, ↓ 2, 「... 導かれる」までを次の文章で置きかえる。

さらに,  $f \neq 0$ ,  $F := \sqrt{2}f/\|f\|$  とすれば,  $\Phi_S(f) = (\|f\|/\sqrt{2})\Phi(F)$ ,  $\|F\| = \sqrt{2}$  であるから,  $\|f\| = \sqrt{2}$  の場合に対する  $\Phi_S(f)$  の本質的自己共役性を示せば十分である. そこで, 以下, 証明を通して,  $\|f\| = \sqrt{2}$  とする. したがって,  $f_0 := if/\sqrt{2}$  とおけば,  $f_0 \in \mathcal{D}$  かつ  $\|f_0\| = 1$  が成り立つ. また,  $B_+ = i(-A(f_0)^* + A(f_0) + 1)(\mathcal{F}_{b, \text{fin}}(\mathcal{D})$  上) と書ける.  $\Psi \in R(B_+)^{\perp}$  としよう. したがって, 任意の  $\Phi \in \mathcal{F}_{b, \text{fin}}(\mathcal{D})$  に対して,  $\langle \Psi, B_+ \Phi \rangle = 0$ .  $f_0$  によって生成される 1 次元部分空間を  $\mathcal{H}_0$  とする. 任意の  $h \in \mathcal{D}$  に対して,  $\alpha(h) := \langle f_0, h \rangle$ ,  $h^{\perp} := h - \alpha(h)f_0$  とおけば,  $h^{\perp} \in \mathcal{H}_0^{\perp}$  であり,  $h = \alpha(h)f_0 + h^{\perp}$  が成り立つ. この場合,  $f_0 \in \mathcal{D}$  により,  $h^{\perp} \in \mathcal{D}$  である. したがって, 任意の  $h_j \in \mathcal{D}$ ,  $j = 1, \dots, N$  に対して,  $h_1 \otimes \dots \otimes h_N$  は  $h_1 \otimes \dots \otimes h_N = \sum h_1^{\#} \otimes \dots \otimes h_N^{\#}$  と展開される. ただし,  $h_j^{\#} = \alpha(h_j)f_0$  または  $h_j^{\perp}$ . ゆえに, 任意の  $g_1, \dots, g_m \in \mathcal{D} \cap \mathcal{H}_0^{\perp}$  に対して,  $g = (g_1, \dots, g_m)$  とおき,  $S_{0,0}(g) := \Omega_{\mathcal{H}}$ ,  $S_{n,0}(g) := \otimes^n f_0$  ( $n \geq 1$ ),  $S_{0,m}(g) := S_m(g_1 \otimes \dots \otimes g_m)$ ,  $S_{n,m}(g) := S_{n+m}((\otimes^n f_0) \otimes g_1 \otimes \dots \otimes g_m)$  とすれば,  $\mathcal{F}_{b, \text{fin}}(\mathcal{D})$  は  $S_{n,m}(g)$  ( $n, m \geq 0$ ) という形のベクトルによって生成される. そこで,  $g$  を任意に固定し,

$$\Phi_n := \sqrt{\frac{(n+m)!}{n!m!}} \frac{S_{n,m}(g)}{\|S_m(g_1 \otimes \dots \otimes g_m)\|} \quad (4.98)$$

とおく. このとき,  $\|\Phi_n\| = 1$ . 上述の  $\Phi \in \mathcal{F}_{b, \text{fin}}(\mathcal{D})$  として,  $\Phi_n$  をとり,  $a_n := \langle \Psi, \Phi_n \rangle$ ,  $a_{-1} := 0$  とおけば, 漸化式

$$\sqrt{n+1}a_{n+1} = \sqrt{na_{n-1}} + a_n, \quad n \geq 0 \quad (4.99)$$

が得られる. したがって, 特に,  $a_0 = a_1$ . 仮に,  $a_0 \neq 0$  とし,  $\tilde{\Psi} := \Psi/a_0$ ,  $b_n := \langle \tilde{\Psi}, \Phi_n \rangle$  とおけば,  $b_1 = b_0 = 1$ . (4.99) を用いる帰納法により  $b_n \geq 1$ ,  $n \geq 0$  を示すことができる. したがって,  $\sum_{n=0}^{\infty} |b_n|^2 = +\infty$ . 一方, ベッセルの不等式により, 左辺は,  $\|\Psi\|^2/|a_0|^2$  以下である. したがって, 矛盾が生じる. ゆえに,  $a_0 = 0$ . したがって,  $a_1 = 0$ . すると, 再び (4.99) により,  $a_n = 0$ ,  $n \geq 0$  が得られる. これは, すべての  $\Phi \in \mathcal{F}_{b, \text{fin}}(\mathcal{D})$  に対して,  $\langle \Psi, \Phi \rangle = 0$  を意味する. したがって,  $\Psi = 0$ .